



杉本明 編著

## 鏡の中の愛

晃洋書房 2001年

英文学の歴史においては文芸作品に見える態度若しくは姿勢をもって古典主義とロマン主義の二種類があるとす。ロマン主義は作者が世界の規範となつてラムブのように光を放ち世界とは如何なるものかを教えようとするもので、19世紀より起こつた文芸態度である。これに対し、それ以前の文芸態度を古典主義と言ひ、作者はあくまで世界を模倣する、言いかえれば作品の中に世界を有りのままに映し出すのであつて、この時文芸作品はいわば世界に向かつて掲げられた鏡でそこに映し出された姿こそ現物そのものとは言えないまでも現物の似姿を完全に模倣再現したいわば鏡の中の映像であると見なしたのである。ここに文芸作品は世界を映し出す鏡であるという一つの伝統が認知された歴史が成立したと言える。

また英文学で近代以降は別として、歴史的に最も重要とされる文芸分野は詩であつた。これは広く認められている事実で、C.D.ルイスなどは英詩は英国の最も有名な輸出品だと言つているほどである。ここから私はロマン主義的作品が現実にあるとしても敢えて英詩を鏡と見なす方法を取ることにした。これがタイトルに「鏡」という言葉を使った理由である。

しからばどんな事柄をその鏡に映し出そうとするのかが次の問題である。私はその対象あるいは主題として恋愛を選ぶことにした、何故なら人は色々な時に真剣になりわが身のありつたけを込めてその思いを語ろうとするだろうが、とりわけ愛に関わる場合はその真実が表に現れるものだと考えられるからである。勿論恋には策略も駆け引きもあるだろう、それでも訴える相手にはそれなりの誠を伝える技量がなくてはならない。以上のような点から、様々な恋愛模様を英詩という鏡に映し出してその諸様相を検討し、加えてその奥に潜む恋愛哲学や恋愛技法を一般的に分かり易く解説できたら、英詩を長年読んできた身として一つの纏めになるのではないかと、そう私は思つたのである。そうした経過を経て『鏡の中の愛』の基礎的概念とともに一冊の本を目指すことになつた。すなわち愛に関わるしかもその諸相を映し出す詩を集め、愛の予感、愛の始まり、愛の苦しみ、それでも続く愛、愛の孤独と試練、愛との別れ、といった各相にそれぞれ複数の詩を集めて一章ずつ割くことにした。テーマとしては一応恋愛詩でしかもそれをどう読むかという入門的なもの

にしたつもりではあるが、中には恋よりも宗教的な愛が歌われているものもある。これは恋愛を恋と愛とに分離することもあるという理屈で些かのずれはあるが割愛し難く残すことにした。その他入門にしては思想的にもかなり難しいものもテーマの都合上入れざるをえなかつたものもあることは否定できない。ものを作り上げる時には万事無事にいくとは限らないどころか時には不可能かもしれないと思ひ知らされた所以である。

ところで無事に行かぬという点でもうひとつ言つておきたいことがある。そもそもこの本の最初の草稿はおよそ10年前の夏休みに出来ていたのであつた。しかし、出版の話が本格化した時、一つ厄介な問題が起こつた。それは、当初出版の切実な狙ひがあつたわけではなかつたので、選んだ詩にはかなりこちらの気楽な好みもあつて、まだ版権に引掛かる詩人の作品が複数含まれていたのであつた。なにしろ総数30篇を超える詩で一々版権の取得は困難で煩瑣であつたからこれらは削ることにしたが、そうすると量が物足らなくなつてしまつた。構成を変えるわけにはいかないが、各章はほぼ同じ長さなので、これはそのまま残し、入門書であるから英詩の読み方の短い序章を付け、さらにその後愛に関する一般的な考え方を愛の掟、公式として紹介することにした。そして全編の終りに、昔から気に入つていて、いつかは少しでも書いておきたいと思つていたジョン・ダンの詩のレトリックについてと、さらにアンドルー・マーズを一篇入れたがおよそ50ページの追加をして、これで漸く体裁が整つたということであつた。後はさらに英詩に興味を持った読者がさらに求めて読む場合の手引きにでもなるかと、本のリストを8ページ強付けた。これでまあ現在の姿になつたというわけである。

しかし、いざ本になってみると、どんな仕事でもそうなのかもしれないが、新たな不満、後悔が起こってくるものだ。一冊の書物としての完成度など問うのも憚られるが、均衡はとれているか、議論、視点、主張は首尾一貫しているか、強引な解釈を繰り返してはいないか、誤解や勘違い、非常識な間違いをしていないか、問う度になんとなく問うこと自体が恥ずかしくなつてしまう程である。大体が己とは何者であるかを問う時、己自体がそんなに理解も把握もしていないという迷宮に入り込んでいることを痛感するものだ。今度の本については後日再考を要するかもしれない、その日がきた時どんな思いをするか俄には見当がつかないが、いまはここで一先ず語ることを止めにしたい。

(すぎもと あきら 文化学部教員)

新シリーズ『自著を語る』に掲載された図書は、先生のご厚意により寄贈され、2階の教員文庫に所蔵されています。



黒坂光 ほか著

## 生化学-基礎と工学-

化学同人 2001年

生化学は、生命現象を化学の言葉で説明しようとする学問である。生化学は、18世紀の有機化学の発展を基礎にして、生命を研究の場とする学問として始まった。当初は、簡単な生体分子の研究から始まった学問であるが、20世紀半ば以降にはタンパク質やDNAなどのより複雑な生体高分子を研究対象とするまで発展した。現在は、これらの分子単独の構造や機能解析のみならず、分子間の相互作用の解析など、より複雑な現象を取り扱うところにまで進歩し、今や生命現象の理解に不可欠な学問にまで成長した。実際、ほとんどの大学の生物系の学部・学科では、生化学は必修科目の1つとして位置づけられている。さらに生化学は、分子生物学や生物工学をはじめとする他の多くの研究分野にも大きく影響を及ぼしており、現代の最先端の生命科学の理解は生化学の理解なしには考えられない。

昨年、生化学を専門とする何かかの研究者により生化学の教科書を執筆する機会を得た。多くの研究者が従事する生化学の分野では、評判の高い教科書は多数存在する。それらの中であって、本書の特徴は以下の2点にある。まず第1点は、対象読者を生物工学を専攻する学生とした点である。したがって、本書は基本的な生体物質の構造・代謝経路の解説のみにとどまらず、遺伝子工学・細胞工学などの応用学問への導入も含んでいる。特に本学の生物工学科の学生にとっては、生化学のみならず他の授業科目の内容も知ることができるので、格好の教材と言えるのではないだろうか。そして、より大事な2つ目の特徴は、本書が単なる教科書の訳本ではなく、各研究者の書き下ろしであることだ。そのため、本書の内容が教科書レベルであるにもかかわらず、各執筆者の専門性や独自性がその内容に反映されているのである。著者の一人としても、編集の段階で他の著者の分担執筆した部分を一読するのは非常に興味深い作業であり、また今後の生化学教育を考える上の良い参考となった。

本書では、どの生化学の教科書にも記されている生体物質の構造と機能から始まり、物質代謝までが最初に解説されている。そして、教科書の後半部では先にも書いたとおり、応用学問への導入部分がそれに続く。いずれの部分も盛り沢山の内容であり、ここでそれについて触れるのは不可能でありまた不適切でもあるので、これらの分野に興味のある方々は図書館に配架さ

れている本書を手にしてもらいたい。

さて、本拙文が掲載されるLib.は読者として学生を対象としていると聞く。そこで、最後に私からの学生諸君、特に新入生へのメッセージを書き記して本稿の終わりとしたい。

早いもので、私が本学で生化学の授業を担当してはや10年以上が経過した。振り返れば、あっという間の年月ではあるが、この間の学生の変化は非常に大きい。率直に言えば、授業内容についていけない学生が増えているのだ。その原因は多くの場合、学生の能力の低下にあるのではなく、勉強の仕方を知らないといった基本的なことに原因があるように思われ残念で仕方がない。

講義内容を十分に理解できない学生の多くは、暗記することが勉強することであるかのように勘違いしているようだ。内容を理解することなしにただやみくもに暗記する。何とも面白くもなく、何の工夫もない勉強法かと思う。人間は高等な生物である一方、限られた能力しか持たないことを認識するべきである。人間の暗記の記憶容量は、安価なフロッピーディスク1枚にも劣るであろう。丸暗記に頼る勉強法で、自らの価値をそこまでおとしめてはいけない。知識の有機的な連携こそ勉強の本質であり、人間にしかできない作業なのである。そのためには理解の伴わない暗記などありようがない。学問とは、本来面白いものなのだろう。そうでなければ、生涯教育・社会人教育などが盛況であるはずがない。しかしながら、趣味的な勉強を越えて学問の本当の面白さを味わう前に、苦しみを乗り越える必要があるのもまた事実である。大学に入学し、日々専門教育を受ける機会に恵まれている諸君には、なんとしてもこの苦しみを乗り越えてもらう必要がある。

学生諸君に勉強の面白さとともに、その苦しさも知ってもらいたい。勉強は、階段を上るようなものであり、決して坂道を上るようなものではないのだ。坂道では小さな一歩でも確実に上昇し目的地に近づく。しかしながら、学問の上達では階段を一段ずつ上る必要がある。つまり、階段を一段分も登りきらないような勉強はやっても無駄なのである。学生諸君にはだまされたと思って継続して学習する努力をしてみしてほしい。階段を一段登り、まだ未熟だった少し前の自分を見下ろす快感をぜひ味わってほしい。その努力を継続するためには、まず諸君が確固たる意志を持った「良き学び手」である必要がある。そして、「良き教員」、「良き友人」、「良き教材」の環境が整った時に必ず成功への道が開けるはずだ。

最後に、本書が諸君の勉強の一助となることを切に希望して筆をおく。

(くろさか あきら 工学部教員)